学 位 論 文 審 査 の 要 旨

		要　　旨
学位申請者	山田　小夜歌 【比較社会文化学専攻　平成26年度生】 （平成30年3月単位修得退学）	本論文は、大正期日本の帝国劇場に招聘されたバレエ教師・振付・演出家ジョヴァンニ・ヴィットリオ・ローシーGiovanni Vittorio Rosi（1867.10.21-1940.4.7?）について、来日以前の芸歴および評価と日本滞在中の活動の内実を解明し、それらの影響関係に着目して検討することによって、ローシーが西欧で体得したバレエとはどのようなものだったのか、またそのバレエの日本への移入はいかなるかたちで試みられたのか、その様相を明らかにすることを目的としている。ローシー自身が来日以前に体得したバレエ、すなわち 19 世紀末から 20 世紀初頭のイタリアや英国ロンドンにあったバレエの性格を、文化的・社会的背景を交えて多角的に読み解き、彼の大正期日本での諸実践との関係性を検討することで、ローシーによって日本で展開されたバレエの実態と特徴を考察した。これまで、「バレエ正史」という概念の中で語られることが多く、見過ごされがちであったローシー由来のバレエのありようを描き出すとともに、その意義について再評価を試みた。 本論文に対する審査は査読に基づいて二回行われ、第一回審査会では、ローシーの来日以前のイタリアとロンドンでの活動を通して世界的なバレエの状況が読み取れる豊かな内容であること、日本における帝劇とローヤル館での活動も詳細な調査によって、バレエ史を超えた社会史とも言えるほどのダイナミックな研究として高く評価された。しかし、バレエ正史とローシーの活動の位置づけが曖昧なこと、当時の演劇との関係にも言及すべきとの指摘がなされ、それらの箇所への修正が求められた。 第二回審査会では、以上の指摘に対し適切且つ妥当な加筆修正が施されていることを確認し、論文の内容が深まったと評価された。 公開発表後、それに引き続いて行われた最終試験における質疑応答においても、真摯な姿勢で満足すべき応答が得られ、研究に対する理解力と学力が十分であるものと判定された。 以上の結果、本論文は博士論文としての到達点に達していると評価され、本審査委員会は全員一致で、学位申請者山田小夜歌が最終試験に合格し、人間文化創成科学研究科の学位、博士（学術）Ph. D. in Dance Studies として認定するに値すると判定した。
論文題目	大正期日本におけるG.V.ローシーの活動と背景： 世紀転換期西欧のバレエ文化とその移入	
審査委員	（主査）　教授　　猪崎　弥生	
	准教授　中村　美奈子	
	教授　　神田　由築	
	准教授　井上　登喜子	
	教授　　貫　成人（専修大学哲学科）	
インターネット公表	○　学位論文の全文公表の可否（　可　・　$\boxed{\text{否}}$　） ○　「否」の場合の理由 ア．当該論文に立体形状による表現を含む イ．著作権や個人情報に係る制約がある $\boxed{\text{ウ}}$．出版刊行されている、もしくは予定されている エ．学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている オ．特許の申請がある、もしくは予定されている ※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について	